

惟福寺の沿革について

佐藤 末喜

はじめに

豊後史蹟考という歴史書がある。佐藤蔵太郎氏が明治三十七年に出版したもので豊後の各郷ごとに、村名や史蹟、神社、仏閣を記述している。

同書賀来郷の項には「由原、金谷迫、宮苑、高崎、山口、七曾子、来鉢、赤野、古原、三船、野田、東院、賀来、国分、平横瀬、中尾、下市、上市、鶴田、黒野、北方、向原、中、鬼瀬、池上、柏野、海老毛、東行、中島、平床、田代、朴木、時松、埴坪の三十四村は、旧賀来郷に属したり、郷は郡の西北に在り、本郷には高崎山高崎村由原山由原村 国分寺国分村 惟福寺高崎村 龍祥寺向原村 極楽寺平横瀬村 圓成寺賀来村 善神王社同上 挾間古駅市村等あり」とあり、特記されるべき寺院として惟福寺が挙げられている。

旧幕時代から大分郡において惟福寺はかなり名を知られた禅寺であった。その沿革を辿るに際しまず江戸時代にどのように扱われていたかをみてみよう。

(豊後国志)

豊後国志は岡藩の医臣、唐橋世済が寛政十年(一七九八)に着手し、享保三年(一八〇三)十一月に完成した地誌であるが、各地の

名所旧跡、神社仏閣も広く取り上げられている。

同誌巻之四には府内を中心にした大分郡が掲載されているが、ここに列挙された佛寺は、

蔣山萬寿寺(府内)、大智寺(府内)、大雄寺(府内)、浄安寺(府内)、来迎寺(府内)、常妙寺(府内)、本光寺(府内)、善巧寺(府内)、報恩寺(府内)、浄流寺(府内)、明王院(府内)、神宮寺(勢家)、法専寺(勢家)、威徳寺(勢家)、本願寺(勢家)、西応寺(勢家)、龍祥院(勢家)、光明寺(駄原)、天神院(駄原)、浄土寺(生石)、靈雲寺(生石)、龍雲寺(白木)、海福寺(田浦)、石上寺(内成)、金剛宝戒寺(律院)、圓寿寺(律院)、瑞光寺(六坊)、岩屋寺(六坊)、善応寺(六坊)、金光明寺(国分)、圓成寺(賀来)、惟福寺(高崎)、龍祥寺(向原)、極楽寺(平横瀬)、大応寺(小原)、永慶寺(大龍)、浄水寺(直野内山)、靈山寺(秋岡)、大泉寺(横瀬)、西光寺(下郡)、專想寺(森町)、龍興寺(鶴崎)、東厳寺(鶴崎)、法心寺(鶴崎)、大音寺(鶴崎)、福昌寺(鶴崎)、海潮寺(三佐)、尋声寺(三佐)、圓光寺(三佐)、安養寺(海原)、正等院(海原)、永安寺(乙津)、長久寺(萩原)、妙観寺(牧)、吉祥寺(向原)、能仁寺(徳丸)、長興寺(松岡)、成大寺(利光)、である。

一覧して分かるとおりにずれも由緒ある名刹ばかりであり、これらに伍して惟福寺が挙げられていることは注目に値する。

惟福寺についての豊後国志の記事は

「在賀来郷高崎。宮苑二村之間。此地旧道寧寺廢址。惟福在其東北半里許。大友氏臣高崎宗傳。及宗久者。並崇敬禪法。於私邑當寺。

名惟福。不知其開祖。寛永之初。雲峯真禪師。移寺於道寧旧址。興其廢。因為中興。尋析室悅禪師。重修宮焉。正保中。悦公又興阿南大龍永慶之廢。」とある。

大意は「賀来郷の高崎、宮苑の間にあり、この地は旧道寧寺の跡地である。惟福寺はここより東北半里のところにあつた。大友氏の家臣高崎宗傳、宗久は深く禅宗を崇敬して私費で寺を建て惟福寺と名付けた。開祖は分からないが寛永の初め（一六二五〜三〇年頃）、雲峯和尚が廃寺になつていたので道寧寺の跡地に移して再興した。よつて雲峯和尚を中興の祖とする。次いで析室悦和尚が重ねて修復した。同和尚は又正保年間（一六四四〜一六四七）に阿南郷大龍村の永慶寺が廃寺になつていたので再興した。」といふところである。

関連する永慶寺の項には

「在阿南郷大龍村、（中略）正保初。濟宗高崎惟福禪寺析室悦公來興其廢。」とあつて、永慶寺の再興に和尚が関わつたこと及び惟福寺が臨濟宗であつたことがわかる。

（雉城雜誌）

同じく江戸期の記録である雉城雜誌の記事をみてみよう。

吉祥山惟福寺 高崎村

本尊釈迦。脇立。久珠普現日羅作。

境内觀音堂。日羅作。

「禅宗ニシテ、其初ハ当寺之東北半里許ニアリテ、天文年中、大友氏ノ世臣高崎宗全、宗久禅法ヲ崇敬シテ、其菜邑ニ艸創スル処也。

開基不詳、寛永ノ初メ、雲峰真禪師、此地ニ転移スト云々。蓋シ往昔ハ道寧寺ト云、廢寺ノ跡ニシテ、其何宗ナル事ヲ傳ヘズ。」

大意は国志に殆ど同じであるが、天文年中（一五三二〜一五五七）と開基の年代を明記しており、ここでは高崎宗傳が宗全となつてゐるが、高崎氏が自らの領地内に創立したといふ。

（惟福寺旧址）

両誌に共通する「東北半里許ニアリテ」をもとにその位置を検証してみよう。方向的には現在地と柞原神宮を結ぶ線上のどこかと想定されるが問題は距離である。筆者の推定では両誌の記事は「吉祥山中興記」を原本としてゐると思われ、同中興記による距離表示をみてみよう。里程表示は「旧惟福之境者在居之東北半里許」と「今惟福之境在府之坤隅相距十有余里」の二箇所あるが、江戸期の一里は五三〇メートル、一町は約一〇九メートルとされていたので、半里許とはおよそ二七〇メートルとなり、旧址と比定されている「ドーノ」はまさに適合する。さらに「吉祥山中興記」にはその地（蕨地）について「蕨地高峻而林□尤美」の説明があるが、その地は高台で峻しい林であり景色の良い所との意である。□の字が残念ながら欠けているが大意はそんな所であろう。惟福寺の前住職西山庸雄氏はその地を通称「ドーノ」（高崎自治区の共同墓地）とし、昭和六十一年同所に「惟福寺旧跡」の石碑を建立された。

高崎の歴史に詳しい佐藤嘉六氏（挟間町高崎在住）も「ドーノ」説を採つておられるが、同氏はとくに造詣の深い「石造物」の面から考証され

- ① 「ドーノ」への石堂川に架かる石橋
- ② 「ドーノ」へ登る三十三個の石段
- ③ 登り口にある二つの石垣

に注目して寺院跡の根拠とされている。同氏によれば①の「石橋」は現状はコンクリート橋に埋め込まれてその姿をみる事が出来ないが、一枚物の頑丈なものであったらしい。②の三十三段の石段も寺院に関りを持つものと考えられる。ただ寺院跡らしい礎石等の遺構が発掘されていない点に疑問を感じるが、同氏はそれらの全ては現在の惟福寺に運ばれ活用されているのではないかと説明されている。筆者も現地に立つてみた実感として、方向・距離・高台・石造物等総合的に勘案すれば、「ドーノ」が比定地として有力であると考えている。

そして寺の規模は堂々たる伽藍を備えたものではなく「小宇」あるいは「草堂」という表現に相応しい程度ではなかったかと推定している。

ここで高崎氏の居城というか館もしくは屋敷がどうであったかが問題として残る。高崎城といえ一般的には「高崎山城」をさすが、領主の居城としては兵時ともかく平時には地形的にもその用を果たしえないと思われる。高崎邑内にあつたと推定しているが、傍証として「高崎今昔記」に「字タジロ、小字ヤシキの山」大友時代屋敷のあと」の地名解説がある。文献や城跡遺跡が発見されていないので、地名などの伝承を頼りに民俗学的に推測してみると、字タジ

ロは「太城」で現在デンケン(株)の工場がある一帯でここに城主の屋敷があつたと思われる。小字名のヤシキの山は文字通り屋敷跡であろう。太城のあつた場所から賀来・宮苑方向に直線的に存在する「水ケ」という地名があるが、これは「見附」であり城を守る役目を持つ。また今は「石堂池」となっている地域は「ゆうじゃく」とも呼ばれていた。ゆうじゃくは領主の直営地を言うが、これも高崎城に関係する地名である。

久珠普現菩薩像や観音像は日羅作との記事があるが、日本書紀に実在する日羅とは年代的にも整合性がない。筆者は熊本、葦北地方の石工集団が大野川流域から府内付近まで活動し磨崖佛や仏像等を残していることから、日羅信仰を持つ彼らグループが日羅と称したのではないかと考えている。上古実在した日羅は葦北出身で百済に派遣され高官に上つた人であるが僧ではなかった。このことについては別稿「歴史資料・石城川村」に詳述した。また日羅上人として大神氏族・阿南氏客僧などと説く向きもあるが史実性に乏しい。

雉城雑誌は府内藩領全体にわたる地誌で、天保年間(一八三〇〜四四)府内藩儒阿部淡済の編述。豊府聞書、豊府指南や豊後国志などを引用しつつ、領内の神社、仏閣、名所旧跡などの由来、伝承を詳細に記述しており貴重な文献である。

(禅宗の伝播)

ここで禅宗が豊後の国にどのように布教されたのかみてみよう。鎌倉新仏教の一つである禅宗は、栄西の臨済宗と道元の曹洞宗に大別されるが、まず臨済宗が先に豊後に入って来たようである。臨済

宗の開祖栄西は、初め叡山にのぼり修学後、仁安三年（一一六八）と文治三年（一一八七）の二度にわたり入宋し、建久二年（一一九一）帰朝後、博多を中心に布教活動をはじめ、報恩寺（香椎）、恵光寺（肥前）を開いている。府内中心に臨済宗が盛んになるきっかけは万寿寺の創立にある。大友五代貞親は、鎌倉で前の執権北条貞時から「貴公は寺を建て僧を養ったことがあるか」と問われ、おそれて小寺に百人の僧を置いていたと答え、のつびきならず帰って徳治元年（一二三〇）万寿寺を建てたという逸話がある。（渡辺澄夫・大分県の歴史）

これは「豊鐘善鳴録」に記載されている万寿寺建立のいきさつを述べた項

「（前略）、平貞時崇信三宝特饗禅風、有時謂豊守藤貞親曰卿宜建伽藍延德僧

以毘政化、豊守唯唯及婦大創禅苑」を平易に意識したものである。

「豊守藤貞親」は豊後守護藤原貞親の略で大友氏は別に藤原氏とも称していた。

豊鐘善鳴録は、豊後森城下安楽寺の密雲（俗名、河野彦契）が、寛延三年（一七五〇）に出版した仏教事典とも云うべき貴重な記録である。

大友貞親は北条貞時にいった通り、万寿寺を建て当時博多の承天寺にいた直翁和尚を招いて開基とした。開山の直翁智侃は足利泰氏の子で寛元三年（一二四五）上州に生まれ、幼時に出家。天台宗や

密教を学んだ後、宋から来日した蘭溪道隆禅師（鎌倉建長寺の開山）に師事し、のちに入宋、帰国後は博多承天寺に住していた。直翁和尚は左大臣藤原忠教の招きで京都・東福寺の住職となつて、一時期万寿寺を離れるが（延慶三年・一三一〇）応長元年（一三二一）、大友貞親の死の直前に再び下向し、以後元亨二年（一三三二）入寂するまで万寿寺に滞在した。名僧直翁智侃が万寿寺にいたことは豊後に臨済宗を広める大きな原動力となつた。多くの僧たちが教えを請い県内各地に寺院を開いたからである。その代表が直翁十門といわれる僧たちである。

自間正聡（實際寺、安岐）、無染正真（顕祥寺、安心院）、豊山正義（万弘寺、国東）、東艘正日（浄土寺、大分）、不肯正授（妙観寺、大分）、悟菴智徹（宝陀寺、太田）、信菴正香（大応寺、庄内）、大機正碩（勝光寺、大分）、密室正機（報恩寺、杵築）、東靈正馨（海蔵寺、臼杵）の十名である。

直翁智侃入寂後も、万寿寺には多くの名僧が来訪し、大友氏の強力な保護のもと、日本を代表する禅寺の一つに発展していくのである。建武年間（一三三四～三六）に万寿寺は十刹に列せられている。禅宗の官寺制度は五山・十刹・諸山であり、万寿寺は東九州臨済宗の中心であった。

（悟菴智徹）

それでは石城川近郊の状況はどうであったかを次にみてみよう。篠原にある慈航寺は貞治年中（一三六二～六七）に悟菴智徹が開山したと寺伝にあり最も古い。同寺には元徳二年（一三三〇）の石造

宝塔があり、もともと天台寺院であったものが廃寺となっていたのであろう。

悟菴智徹はさきに触れたように直翁の高弟の一人であり、諸山に列せられている大田村の田原蟠龍山宝陀寺をはじめ、真玉寺（真玉町）、徳勝寺（豊後高田市）、円明寺（武蔵町）の開山としても知られている。悟菴には、貴菴、可菴、正慧、浄山など多数の弟子があり、彼らは天台宗勢力の強かった国東半島一帯に寺を創り臨済宗の弘通につとめている。

向原の龍祥寺は狭間氏の菩提寺であるが、豊後国志によれば放牛和尚が応安三年（一三七〇）に開山したという。放牛和尚は放牛光林といい、入宋して帰国後万寿寺を経て、建仁寺、天竜寺、南禅寺などを歴任した高僧である。ただ「狭間家譜」や龍祥寺墓地内の五輪塔銘から年代考証すれば、応安三年以前にすでに龍祥寺は造立されていたとも考えられるが、禅宗であったかどうかは定かではない。賀来の圓成寺は悟菴の弟子である可菴が永禄六年（一五六三）に再興したとされている。豊後国志の記載によれば

「国志曰。在賀来郷賀来村。永禄六年七月。僧可菴到此。見燼余荒廢。悲嘆。遂興廢址。名圓成寺。此寺雖不知其創。本尊弥陀佛。佛工定朝所造。蓋三條院朝人。距今五百余年其古可知己。」

圓成寺境内にある五輪塔には、建武元年（一三三四）の銘文があり当時すでに前身の寺が存在していたことが明確である。「当寺は賀来莊地頭賀来氏の氏寺にして、賀来氏居館と伝ふる所も付近にあり」（渡辺澄夫氏、豊後国莊園公領史料集成 五）とされる古刹で

ある。兵火に遭い廃寺となっていたのを可菴が臨済宗の寺として再興したのであろう。又圓成寺は中尾に寺領を持ち、天澤寺（賀来）、善応寺（中尾）、天福寺（東院）、安定寺（国分）を末寺として抱える有力寺院であった。

隆盛を極めた万寿寺も、数回にわたる火災で室町時代末期には廃寺同然の姿となり、漸く寛永十年（一六三三）に再興されるのである。惟福寺が天文年間に大友支族、高崎氏によって創建され、寛永の初めに再興されるのは、この万寿寺や永慶寺（大龍村）の場合と時期を同じくしている。徳川幕府によるキリシタン禁制政策の進行と宗門改・寺請け制の発足にあわせた寺院側の体制整備、強化の時期に符合するのである。寛永九年（一六三二）の幕府命令による末寺帳の作製、檀家制に伴う寺の絶対数の不足から、全国的にもこの時期に、真宗道場の寺院化が盛んとなり寺院が急増している。雉城雜誌がいうように、高崎宗全・宗久父子が惟福寺を創建し氏祖の菩提寺としたとすれば、大友末期・天正年間の高崎氏の経済力は相当なものであったと想像されるがはたしてどうであろうか。

（道寧寺）

雉城雜誌は惟福寺の前身について、「道寧寺ト云、廢寺ノ跡ニシテ、其何宗ナル事ヲ傳ヘズ」と書いているが、道寧寺がどういう寺であったのか推測してみよう。平安時代、豊前・豊後二国の仏教は天台宗が中心であって、鎌倉中期頃まで六郷満山で知られる国東半島を中心に仏教文化が栄えたが、その基盤は天台宗であった。国東半島以外で平安時代以前に成立したとされる天台寺院は、現大分市

域では大山寺、岩屋寺、国分寺、靈山寺、圓通寺があり、そのほかでは耶馬溪町の正平寺、三重町の蓮城寺、朝地町の神角寺などが主なものである。大山寺は柞原宮師金藏院歴代の菩提所といわれており、明治初の神仏分離までは、神宮敷地内に存在していたとおもわれる金藏院の末寺である。明治二年（一八六九）の「諸国御配下寺院雜記」に「豊後国元由原山金藏院が復飾（還俗）したので、同院の末寺である大山村大山寺と黒野村妙蓮寺は、以後同国圓壽寺の末となる。」とあり、近世まで金藏院の末寺であったことがわかる。

この文書は圓壽寺が比叡山に願い出たものであるが続けて「このままにしておく、かつて本寺（圓壽寺）末であった石城寺のようになる恐れがある。それは石城寺が無住になった折りに禅僧を留守居に置いたところ、その僧が住職願いを出してとうとう石城寺は禅宗寺院になってしまったということである。このようなことが再び起こらないように、大山寺・妙蓮寺の両寺を圓壽寺末としたい。」というものであり、大山寺も妙蓮寺も石城寺も天台宗寺院であったことがわかる。

吉祥山中興記に「土俗相傳云堂尾蓋密宗之碩学闢之譜系末有所考焉」とあり、この密宗とは天台宗を指すものと筆者は考えている。平安期の密宗は真言・天台二宗であるが、叡山の金龜和尚が開祖したという柞原八幡宮との地域的關係や、石城寺、慈航寺（篠原）、妙蓮寺（黒野）等近在の状況を考慮すれば、天台宗とするのが妥当であろう。特に妙蓮寺が柞原神宮・金藏院の末寺の一つであった事実は大きな説得力を持つと考える。なお、来鉢の金光寺や中畑の徳

台寺もかつて天台宗であったと言われているが（挾間町誌）定かではない。徳台寺の場合は本尊の阿弥陀如来が仁聞の作と伝えられていることによる。石城寺は宝龜年中、仁聞菩薩の開基で最古刹とされている。仁聞菩薩については拙稿「歴史資料・石城川村」、石城寺の項に触れているが、養老二年（七二二）、六郷満山を開基したという伝承がある。仁聞開基説や仁聞作の本尊の伝承は何らかの形で天台宗と結びついていると考えていい。

なお「高崎今昔記」（高崎老人クラブ・福寿会編）によれば、道寧寺は天慶二年（九三九）に空也上人によって創建されたという。空也（九〇三〜九七二）は平安中期、民間の浄土教の祖とも言える僧、弘也ともいい、市聖、阿弥陀聖、市上人などとよばれた。その出生については醍醐天皇の皇子とも、仁明天皇の皇子常康親王の子ともいわれ、貴種として伝えられているが、みずからは父母のことを云わず郷土を語らなかつたという。二十余歳で尾張の国分寺で出家し空也と名乗り各地で修行を続けたのち、九四八年（天曆二年）比叡山に登り天台座主延昌について受戒し、光勝の名を与えられたがその後も民間の布教僧として活動した。空也と豊後の關係については「豊後国志、国東郡」の項に

「元亨釈書曰、六波羅密寺空也上人、諱光勝、仁明帝孫、常康親王子、薙髮為沙弥自称空也、少好失遊、天下殆遍、所遇道塗為利濟、天曆中遊化此邦、於国前創興道寺、速見八坂建利益寺、並栖居焉。」とあり、ほかにも小武寺（東山香）や朝日寺（杵築）を創建したという。空也は諸国を遍歴したと伝えられるところから豊後にも来た

であろうとの推測であろうが、史実としての豊後入りの事実は確認されていない。道寧寺・空也創建説はあくまでも伝承であるが、ただ天台宗との関連を窺わせる点に意味があると筆者は考えている。なおまた「高崎今昔記」に「大神惟基の次男惟季が阿南郷の郷司になり勢いを南に伸ばし道寧寺の荒廃をうれい、大神家の客僧日羅律師の傑作観音菩薩の像を安置して、堂尾に小宇をまかない一族の菩提所とした」の記述がある。

大神氏祖・大神惟基の生存年代については諸説があるが不明というほかない。次男惟季は阿南次郎と呼ばれ、天仁二年八月卒、六十二歳（阿南氏系図）とある。天仁二年は西暦一一〇九年に当るから惟季の生涯は一〇四七年～一一〇九年ということになる。道寧寺が創建されて約二〇〇年後のことであり年代的には整合性があるが、阿南氏菩提寺説にはなお検証の要ありと考えている。なお惟季より四代後の嫡子惟家は太友氏の豊後入国に反抗して高崎山城のこもり、五十四歳で討死し阿南氏は滅亡したとされている。

（山林仏教）

上古以来わが国では人里を離れた山や海などを他界とする信仰が広く流布していた。とくに山岳は稲作や日々の生活に必要な水をもたらす神がいるところとされ、恐れられ崇められてきた。と同時に山を靈地として崇敬し、山に入ることをタブー視してきた。わが国の神社の多くが山麓の祠の系統であるといわれているのは、農民達が山の神霊を招いて、豊作や生活の安定を祈る場として山麓に祠を作ったことに起源する。ところが山林修行を重んじる仏教や道教が

伝来すると、それまで禁忌とされていた山岳に積極的に入って修行する者が現れた。大和の葛城山で修行し、修験道の開祖とされた役小角はその代表的存在である。平安初期、最澄は南都・奈良を離れて叡山に入り天台宗を開き、空海は大学を捨てて山林を跋涉し高野山で真言宗を開いた。この日本仏教界の二大巨人も山林修行者の流派に属するといえるのであって、空海の実言密教に続いて天台宗も密教化していくが、この密教の修験者たちは山岳の社寺などに依拠して山林修行にいそしんだのである。この時期の寺院の多くが人里離れた山奥に建立されているのは、紀州熊野の青岸渡寺など多数例があるが、卑近なところでは石城寺もその部類に入るように、この山林修行という要素によると筆者はかんがえている。木村衡氏は「古代の地方山林寺院について」（雄山閣）と題する論文の中で、

「文献に現れた山林寺院については、以下の四種類が指摘できる。

- ・ 官僧は呪験力の獲得を目的とした修行を行う、大和盆地周辺の山林を例とするような、伽藍を持った寺院。
- ・ 地方における山岳信仰の拠点としての寺院。
- ・ 山沙弥所
- ・ 私度僧の修行拠点」

と述べているが、山林寺院の実態はおおよそこのようなものであったであろう。勿論寺院の全てがこうした山林に位置したわけではなく、京域やその周辺及び拓けた平地にもより多く建立されているが、全国的なその分布において「凡そ国内いかに辺境の土地なりとも、中世以前において、真言・天台両宗のいずれかに属する寺院の

存在しなかったところがあるのか。」(菌田香融、平安仏教)という盛況であった。

それではこのような寺院はどのように維持されていたのであるか。中央では貴族と結び彼らを檀越(檀那)とし、寺院自身もまた貴族化することによって発展したが、地方では在地の豪族が檀越となつて支えた。彼ら地方豪族は在地における自らの不安定な權威を補強する役割を仏教にもとめたのである。こうして寺院は檀越の盛衰によつてその存続を左右され、とくに地方では豪族の没落によつて廃寺となるケースが多くみられた。密教寺院であつたと思われる道寧寺がいわゆる山林寺院であつたのかどうか、またどのような経緯で建立され、そして廃寺となつたのかは筆者の推測能力を超えるが、高崎の地に存在していたということは、この地には道寧寺を受容しうるだけの基盤があつたといえよう。また先に触れたように阿南氏の庇護があつたとすれば一つの論拠となるであろう。

(吉祥山中興記)

大正六年一月、石城川村は役場職員・学校職員の共同編纂によつて「石城川郷土誌」を刊行した。同誌に収録されている「吉祥山中興記」は(大歳丁丑元禄十年三月下澣)、すなわち元禄十年(一六九七)三月下旬に書かれたものである。記事内容は全体的に美文調の誇大表現が目につくが、何よりも書かれた時代は宗伝・宗久の創建後一〇〇年足らずのころであり、寺の記録や伝承も確かであつたであろうから信憑性は高いと考えている。

なお現参道脇に天正十二年(一五八四)十月八日銘の石幢がある。

銘文に曰く

「現在未来天人衆、吾今懇勲付属汝、以大神通方便力、勿令墮在諸惡趣、□□立六地藏之事、帰真月窓妙梅禅尼靈位、為頓証菩提也、天正十二年甲申十月八日 施主 安部玄蕃允貞述謹立」

この六地藏石幢はこの地が寺院跡であつた事を示唆する証拠であるが、惟福寺が移転してくるのが寛永の初め(一六二五～一六三〇)であるから、その四十～五十年前までは道寧寺は存立していたことになる。

なお「豊後国大分郡寺院明細牒」の由緒によれば

「延宝二甲寅年本山開祖開山派下十三世法孫融峯土禅師創建ス 故ニ為開祖其後暫世代不詳也 享保十九甲寅年龍雲祖門禅師中興ス」とあり、一七三四年・享保十九年に中興されたことになるがこの点は「中興記」と相違がある。寛永九年(一六三二)の幕府命令以後は檀家制の維持上、寺院は連続して存続しなければその役目を果たしえなかつたのであるから、惟福寺も一時的にせよ廃寺になることなく今日に至つたと筆者はみている。由緒にいう中興とは、寺勢を大いにしたという意味であろう。「石城川村郷土誌」掲載の「吉祥山中興記」全文を以下に掲げる。

吉祥山中興記

扶桑国鎮西路豊之後州大分郡吉祥山惟福寺者境属高崎地接宮苑而鞠其挿艸之由未歳月相運不詳之権與之為主者亦共其姓名矣故老之言曰此地者本道寧之地也合両寺而成一寺舊惟福之境者在居之東北半里

許厥地高峻而林□尤美先是有高崎宗傳者其子玄宗久敷代仕吠友嘗以此地為食邑矣厥祖宗信佛學擁護當山故食觀方充僧侶亦集採樵之山植蔬之圃凡資身之具悉備焉隨世之季運僧道亦廢矣故殿堂門廡盡烏有矣寢陋之室矮之牀僅容身而已數十年來不能舉此役唯賸小宇安觀音之聖像日羅ノ傑作也露霜相侵修造不密金軀告色毫光將謝矣民以造詣為艱故移之蓮池現在干今也土俗相傳云堂尾蓋密宗之碩學闢之譜系末有所考焉予相今惟福之境在府城之坤隅相距十有餘里鶴見木綿獄之諸峯桃布西北本宮飛未山之衆嶺映帶東南此則山門之大觀也其間四時之景變幻不窮分則百花明媚萬葆匝地夏則松竹侵堦清風徐來秋則丹楓盈谷霜月流輝冬則密雪遵山早梅破玉凡所眼力之及盡無不精淨誠是以為演法之場矣寬永庚午之年實宗眞公據主位公者本州早見人也鉄錫橫擔偏歷盡湖海之風波後嗣融峯円嗣單印嗣南北與遠沂関山十四世之孫也既到眞公始立我臨濟之宗風故推以為當山之中興矣自公之居此地里有積善慕義之風十利具陳三德畢備焉以技開門庭之久絕興古屋之已倒末境全功而逝矣實萬治庚子之冬也寬文癸卯之歲壁道心公繼席公亦同郡人也首受業於實宗後嗣融峯圓既開祥山之櫺轡陶鑄大鐘啓發群品蓋亦有年矣慈地燥剛泉眼不明公探脉鑿之丈餘水必然出至テ今澡浴不欠矣延寶戊午之秋卜隱於幽邃之地消搖終其身矣其徒祖泰相踵而看院矣兼有南詢之志扁然去矣今住持戒諱惠禪道號栢翁本山人也天和癸亥之春未焉領山□□有令德兼善於包荒首依融峯圓後到月之文永謁師兄超宗宗授以祖印爾未乘實宗之志願式住十歲不記身之困憊風雲際會遠近為之偃矣元禄庚午之春在巖薩埵之靈軀金輝秀起煥然大集目相好巖華實海西之妙製也辛未之年鼎新外門申戌之秋移堂之基石於後圃盡撤具舊廣

而新之丁丑之歲命匠弘教彫刻此土教主釋迦文佛西方世界阿弥陀佛之両軀同安置於一堂四八靈相妙盡毫端面首殊麗瞻仰無已剞劂之飾拔金之華実無慚於優填復摸韋馱天像□令加護持矣凡大小梵宇相尋復輪真鱗鱗死鳥瓦絶滲漏於堂中赫赫燈大破群迷於昏衢終請定惠円明国師為開山初祖矣嗚呼禪公之於堂山也可謂勤矣薰山之末我年凡禪林所宜有者悉備焉不翅成師赦之願兼要挽回叢林之元氣其規模博乎哉夫春氣發而百草生正得秋而萬実成想夫此山得垂秋之時乎便請戴其顛末垂干無窮予之不類也何堪記載之任耶雖然公者策進之友也不敢而辭於是乎書

大歳丁丑元禄十年三月下泫

無印紹珠題於大雄之鴻漸軒

(高崎氏について)

ここで惟福寺を創建した高崎宗傳父子に繋がる高崎氏についてみてみよう。太田亮氏は「豊後国の豪族にして、大分郡高崎邑より起ころ。高崎城あり。大友系図に、能直―景直（或は時景、一萬田太郎左衛門尉）、大和守高崎云々等の祖と見ゆる後也」と姓氏家系大辞典に記している。大友系図・続群書類従巻第一百五十、系図部四十五によれば「藤姓、親能―能直―景直、或時景、一萬田太郎左衛門尉、大和守、法名蓮景、母同親秀、豊前之城井耆岐前司景房入道蓮昇養子、一萬田、城井、豊饒、高崎、井上、袴田、太田等之祖。」とある。大友志賀系図や大友田原系図・大友木付氏系図もほぼ同様な記載である。高崎氏の祖は大友能直六男・時景として間違

いない。

さらに詳しい記録が鹿兒島・薩摩藩に残っている。鹿兒島県姓氏家系大辞典によれば「大友氏元祖能直の六男太郎兵衛景直の子次郎忠能が豊後国高崎城主となって高崎氏を称した。忠能は大友守親の娘が島津貞久に嫁いだのに従い、忠能―四郎左衛門久邦―武邦―尾張守久能―彦三郎能充―播磨守能名―播磨守能宗入道有閑と続く(後略)」とある。また鹿兒島県史料集(Ⅷ)・本藩人物誌には「高崎播磨守能宗入道有閑、子孫高崎惣右エ門、播磨守能名ノ子也先祖ハ大友氏ノ支族也 大友元祖左近将監能直六男太郎兵衛景直其子次郎忠能豊後高崎ノ城主ニテ高崎ト号ス 五代太守貞久公御簾中大友因幡守親政ノ息女御入輿ノ節忠能小田原氏兩人為御輿添御供仕御当国へ参り候(後略)」と出ている。この両誌の記事は、薩摩藩十四代惣領勝久の家老となっている高崎播磨守能宗入道有閑の人物誌で、同氏の出自来歴を紹介したものであるが、ここに高崎氏の祖が高崎(一萬田)忠能として出てくる。両誌の内容を箇条書きにしてみる。

* 薩摩藩五代・貞久に大友四代・親時の娘が嫁入りした。随行役として、能直六男景直(時景)の庶子・高崎(一萬田)忠能と小田原氏が薩摩に下った。(小田原氏は能直の弟・古莊重能の子小田原景泰の一族である。)

* 高崎忠能は薩摩に残り一族は栄え重用されて、家老を務めるまでになった(十四代勝久の家老・播磨守能宗)。

* 家老高崎氏の祖は、能直六男景直の子次郎忠能であり、豊後国高

崎の城主であった。地名をとって高崎と号した。

ということになる。家老にまで出頭した高崎氏の出自であるから史実性・信憑性は高いと筆者はみている。

このようにして高崎氏は鹿兒島と豊後に分かれたが、豊後高崎村に残った高崎氏についてみていこう。

① 高崎氏の史料上の初見は、南北朝動乱期の「角違一揆」である。ここに合戦奉行として高崎尾張守が出ている。

② 次に永享五年(一四三三)大友持直知行預ケ状(大分県史料三一)に

高崎

一所三拾七貫分一所三十貫分石垣 高崎又五太郎跡

一所二十五貫白杵

とあり、高崎の地名の歴史上初見とされている。

③ 永享八年(一四三六)の姫嶽合戦の大友持直方着到人交名に高崎若狭介(助)、高崎十郎右衛門(尉脱カ)あり。

④ 高崎棟治寄進状

嘉吉四年四月五日(一四四四)、高崎尾張守棟治が由原宮に対し、金亀和尚の御供田として高崎村畑二反を寄進した。

「寄進状 嘉吉四年甲子卯月五日 尾張守棟治

奉寄附

豊後国一宮八幡賀来社金亀和尚御供田事

合式段者在坪阿南庄之内、高崎村畑分由原下馬林道越

(以下略) (大分県史料九)

- ⑤ 康正三年(一四五七)正月十七日、高崎親治が狭間村北方内龍原角屋敷土貢六貫三百分の在所を小野三郎に預けている(小野信夫文書)

「狭間村北方内龍原角屋敷土貢六貫参百分

在所事、預置候、任先例可有知行候 恐々謹言

康正三年正月十七日 親治(花押)

小野三郎殿

この記事について庄内町誌は「北方内龍原角屋敷土貢(田租)六貫三百分の在所が、高崎親治から小野三郎に与えられているので、少なくとも龍原地区を含む所領は大友親雄の手を離れ、高崎氏が知行する地区になっていたことは確実である」と記している。また挾間町誌は「高崎親治は棟治の子であるか」と親子関係を推量している。

- ⑥ 義鎮暗殺計画

天文二十二年(一五五三)正月四日、一万田弾正忠鑑相父子および鑑相の弟宗像民部少輔鑑久と高崎一類が上意として賀来民部・同将監兄弟によって生害された。賀来民部も重傷を負い死んだ。また義鎮には伯父に当たる服部右京太夫も山下二郎左衛門によって生害された。いずれも義鎮に対して謀反を企んだという理由であった。宇佐到津文書によれば

「一同四日辛亥、於豊後符中、為上意一万田弾正忠父子を、賀

来民部・同将監兄弟承生害候、民フカテ死、将監生候、ムナカ

夕高崎一類同前候、又御屋方様ヲチ、服部之右京大夫殿とも、山下二郎左衛門承、生害候、右之人時ニ義鎮野心之由、有其間候、」とある。この事件によって一万田氏と高崎氏は大きなダメージを受け衰退していくことになる。また一万田一族が対薩摩・島津氏との戦闘で、大友方に反逆する原因ともなった。

- ⑦ 先に引いたが雉城雑誌に「吉祥山惟福寺 高崎村(中略)天文年中、大友氏ノ世臣高崎宗全、宗久禅法ヲ崇敬シテ、其ノ菜邑ニ創スル処也」とある。天文年間は一五三二〜一五六五年であるから宗麟の治世下と重なる。すなわち宗麟は天文十九年(一五五〇)家督を継ぎ、天正元年(一五七三)子義統に家督を譲っているからその治世は二十三年に及ぶ。この時期宗全・宗久親子が大友氏の家臣であり、領地に菩提寺を創建したことになる。この宗全・宗久親子は⑥で生害された高崎氏の別流であらう。

- ⑧ 高崎鉄充

大友義統合戦手負注文一見状に衛藤統門の被官である高崎鉄充が、天正十三年(一五八五)八月十六日杷木郷池田城攻で、矢疵を負ったという記事がある。(大分県史料三三)

- ⑨ 高麗陣着到

「同義統ノ代ニ朝鮮征伐ノ節ノ到着表ノ中、高崎隼人佐アルヲ見レバ、」文禄元年(一五九二)三月十二日のこと。(雉城雑誌・大友氏城址)

⑩ 石垣原の戦いで大友義統軍に参戦した高崎氏は、一万田氏と共に敗戦後竹田岡城近くの挾田村に帰農した。高崎林治氏（横浜在住）のご研究によれば、幕末勤王派の志士として活躍した高崎善右衛門（岡藩士）の墓が竹田市玉来にあるが、先祖は大友家臣高崎隼人と墓石に刻まれているとのこと。豊後高崎氏の系譜は今日まで続いている。

（余録・光西寺と高崎氏）

先年刊行された「光西寺史」によれば、光西寺に伝わる「年代記」に、「開祖円信は、大友一族の高崎播磨守著景の三男で、長兄に万寿寺住職の天用がいますと記されています。父著景は永享年間（一四二九～四〇）に讒言によって殺され、難をのがれた母親は密かに京都へ上り蓮如上人と出会って門徒となったとあります。そして当時身重であった母から生まれたのが円信であると記されています。永享十一年（一四三九）京都で生まれた円信は、後に本国に帰って一堂を建立することを蓮如上人に約束したことが述べられています」

光西寺の創建年代は明記されておらず、大友親繁の守護在職中（一四四四～八九）の事としかわからないが、豊後国志によると文明年間（一四六九～八六）の頃とされている。

高崎氏は、高崎の領主として長い間この地を支配してきたが、高崎氏に関する史跡や、記念となるものが何一つ残されていない。又言い伝え等もないことは何とも不思議である。唯一の史料が「吉祥山中興記」である。